松居家誌

特258
388

始

特258
388

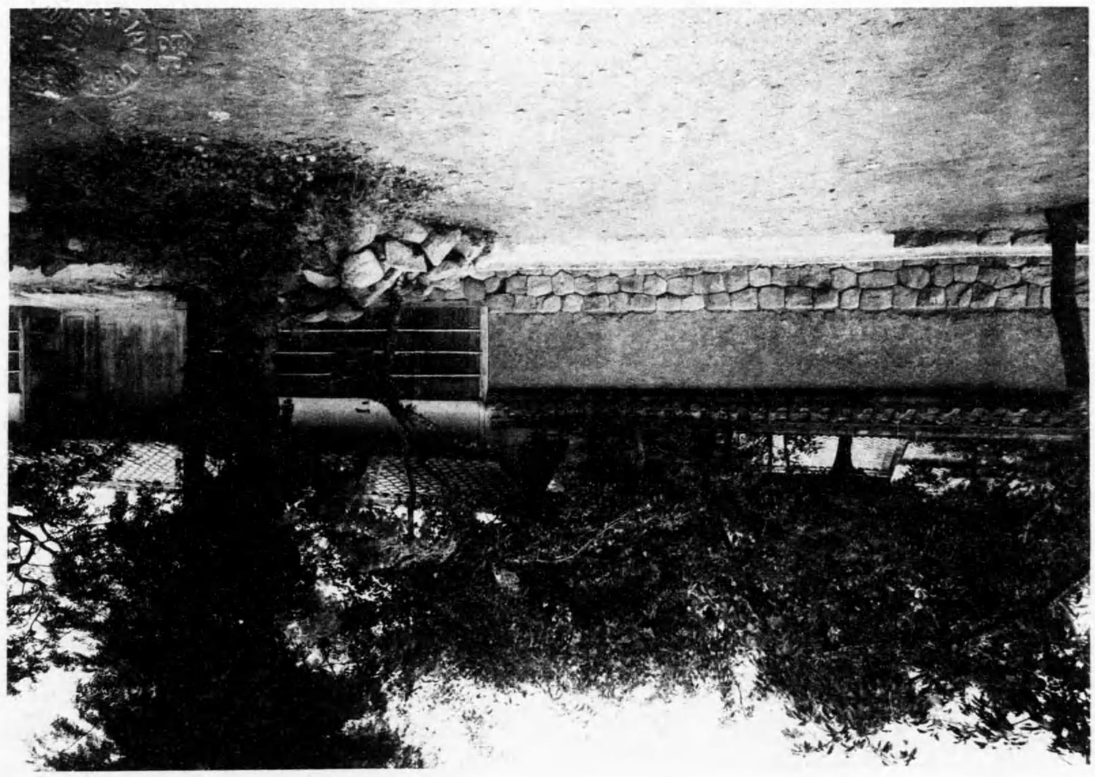
松居家誌

きみの代は千歳にそなへ
さゝれ石の
苔のむすまでも
あらなむとぞ思ふ

源氏住和改竄の古歌

東京堂

内境社神水命運　座鎭色一下



親外邸門衛右衣　家宗居格

はしがき

大正の末年愛知郡役所の廢止さるゝに際し、郡誌編纂を企圖され予に其編著を囑託せらる、予乏しきを其責に任じ爾來郡内各大字を巡回して親しく各種の調査を進めたり、去年四月西押立村調査に際し前村長一守傳平氏邸に一宿し同大字の總ての古傳を聞き、翌日其大字の寶珠寺より始め順次各所を歴訪したり、是より先き大正六年蒲生郡誌の史料調査に際し、京都帝國大學にて本願寺文書を借覽せし時同寺の坊官たりし下間系圖をも一覽したり、其中に下間氏子孫の一人が愛知郡に潛居せし記事あるを見て寫し置きたりしが、今度愛知郡の調査に際しその記憶を追懷して當年の寫帖を檢せしに下一色村松居文右衞門なる者其子孫なりと記さるゝにより、寶珠寺に於

て其文右衞門家の事を訪ひしに一族の人等集ひ來りて菩提寺寶珠寺の過去帳や文右衞門家に傳はる年代記樣の記錄とを提出され依て下間系圖に符合するを發見したり、此くて其事を話せしに松居泰次良房治郎兄弟は豫而より其祖先の墓を建てんと欲しつゝありしに、同年三月機愈々熟して墓地を京都東山東大谷に相し工事は既に石工の手により進捗中なりとて予が下間系圖の談を聞き事の奇偶を喜び合はれたり、其後一族は更に祖先以來の來由を明にして之を子孫に傳へんとてその家史編修を計畫し其編者たるべきを依賴せらる、予は筆事多端其需めに應じ難きを以て辭したるも强て切望さるゝにより遂に一族松居文次郎謙三二氏が發起者の囑を受け調査提供せられし史料と下間九鬼三郎氏所藏の系圖等により此の家乘を修したり、若し夫れ記事の足らざるもの又誤れるものあれば族者

之を正さるべきなり、

昭和三年正月

中川泉三しるす

松居家誌　目次

產土神、押立神社境內寫眞
家祖崇敬之神、運命水神社境內寫眞
松居宗家文右衞門邸、外觀寫眞
松居家誌總說……一
松居家の元祖下間家……五
松居氏太祖源三位頼政卿畫像
松居氏元祖下間蓮位房木像
下間蓮位房墓所と碑文
下間家本邸之景
下間家當主九鬼三郎仲臣氏肖像
松居家本支孫分流圖

松居一族分脈系圖下一色村移住後……七
傳、源三位頼政卿筆蹟
本願寺九世實如上人筆、和讃
顯如上人消息
松居宗家系圖……一一
元祖清重文右衛門　畫像寫眞
二代清光金右衛門　同
三代清孝文右衛門　同
四代清政文右衛門　同
五代清信文右衛門　同
六代清則源　八　同
七代清定文右衛門　同
八代清嗣文次郎　同

九代清成文右衛門　清成肖像、室りを子肖像
十代清經常次郎　肖　像
十一代清一一良　肖　像
松居氏第一分家系圖惣兵衛家……二一
一色宇平清澄肖像
松居氏第二分家系圖吉右衛門家……二五
松居吉右衛門清道肖像
松居氏第二分家、第一支家系圖忠兵衛家……二九
松居仙太郎清雄肖像
松居氏第三分家系圖五兵衛家……三一
松居源造清之肖像
松居氏第四分家系圖文左衛門家……三三
松居文左衛門清朸肖像、清太郎清素肖像

松居氏第五分家系圖 利左衛門家……三七
松居長三郎清實肖像
松居氏第六分家系圖 儀兵衛家……三九
松居文三良清光肖像、みき子肖像、同文次郎清長肖像、同良三清憲肖像
松居氏第六分家、第一支家系圖 眞三郎家……四三
松居眞三郎清安肖像、室美惠子肖像、松居直次良清隆肖像、松居新太郎清篤肖像、
第六分家、第一支家、第一孫支家系圖 房治郎家……四九
松居房治郎肖像
第六分家、第一支家、第二孫支家系圖 泰次良家……五一
松居泰次良肖像
松居氏第七分家系圖 謙三家……五三
松居謙三肖像、同夫人しげ子肖像
緣族西村氏……五五

西村一良平肖像、西村治三郎肖像、川崎しげ子肖像
緣族　村松氏……六一
村松三郎兵衛肖像
緣族　森　氏……六三
一　森嘉平家……六三
森嘉平肖像
二　森半三郎家……六五
森半次郎肖像

餘　錄

產土神　押立神社由緒……六七
押立神社大祭古式大渡りと松居清光……七〇
崇敬神　運命水神社由緒……七〇

菩提寺　寶珠寺……七一
松居清忠及清武の神の池掘鑿と其寄附……七二
寫眞　起工式記念　揚水式記念　用水路工事中の記念　竣功式記念
松居家總墓碑の建設と除幕式……七三
寫眞　墓碑と碑文　除幕式記念撮影
卷末の辭　筆を擱くに當りて……七九
編者中川泉三肖像

目次終

松居家誌

一　總說

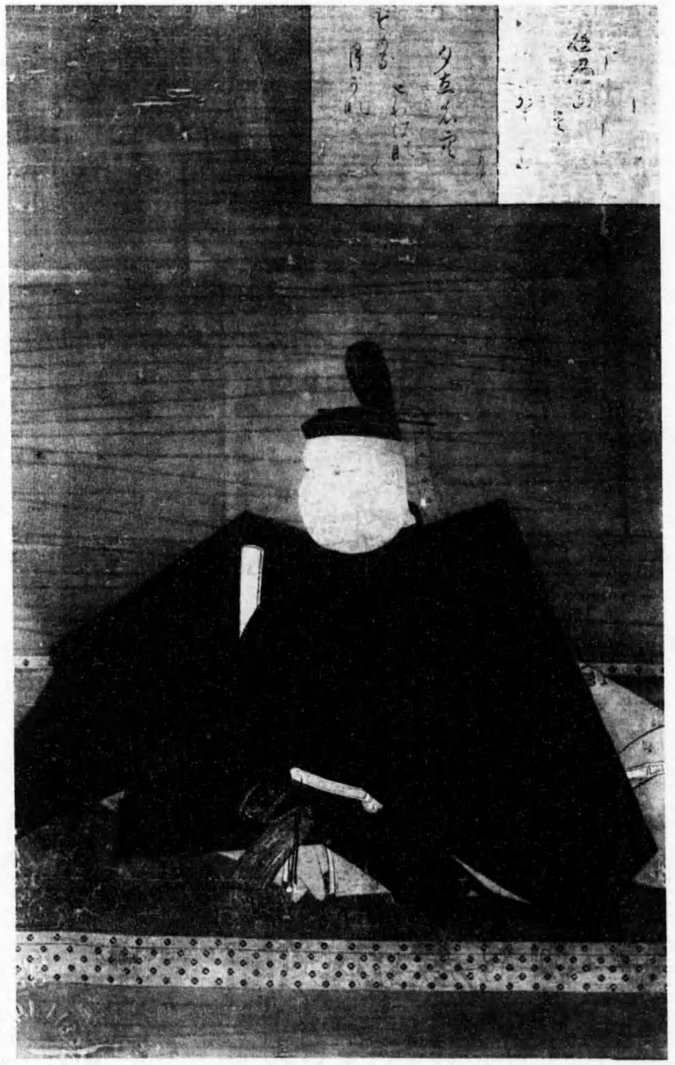
近江國愛知郡押立庄下一色村に住する松居氏の先は清和源氏にして鎭守府將軍滿仲の二男源頼光より出つ、頼光は武勇絕倫にして將略あり、彼の大江山山賊を討伐して世に名高き頼光是れなり、其の子頼國より頼綱、仲政を經て頼政に至る、頼政は源三位を以て武名高し、治承四年以仁王の令旨を奉じ平氏討伐の軍を擧げんとし事早く露はれ平清盛の軍と宇治に戰ひ平等院に陣歿せし驍將なり、頼政の子仲綱より宗綱、宗仲を經て宗重に至る、宗重は常陸國下妻庄に住し依て下妻を氏とす、親鸞聖人巡錫の時其教化に隨喜し薙髮して蓮位房法阿と號す、爾後聖人の高弟として常に聖人を補佐す此れを本願寺坊官下間家の祖とす、下間は下妻の一字を改めたるなり、夫より來善、仙藝、長藝、慶乘、慶阿、玄英に至る、玄英三

子あり、長を頼永、次を光宗、三を頼善といふ、頼永等兄弟三人分るゝに及び頼永は下間刑部卿家と稱す、次男光宗は下間少進家にして實に松居氏の祖なり、三男頼善は下間宮内卿家の祖となる、下間少進光宗は天文二十二年二月卒す、其子頼清二男兒あり、長子述頼は天正三年八月一向一揆の指揮者として越前國に出陣し十五日白木戸の戰に戰死す、弟清基は翌天正四年亂を避けて近江に來り愛智郡下一色村に潛居し後ち姓名を松林文右衛門清重と改む、子孫連綿永住し世々其村の庄屋役たり、就中文右衛門清則の如きは庄屋在役三十七年の長きに亙り勤續したり、又一族の分支次第に繁茂し分脈今十二家となる、盛衰の浮動は猶海洋の波の如く一隆一沒一凸一凹を繰返しつゝ此村に土着して連綿たるあり、又大坂京都東京の都門に移り商業に從事して長足の發展を爲し家運の隆々たるあり、業務一ならずと雖も家祖清重が下一色村移住後星霜三百五十餘年子孫連綿として一族十二家となり榮ゆるは類ひ稀なる所、古語に所謂積善の家餘慶あるもの歟、一族の分脈は左記系圖によりて明なり、又其人の特種なる事績は其名下

に注記す、明治四年朝廷令して全國の民に姓氏を公稱せしむ、此時に當り下一色村には村名を姓氏とする者もありたれば一村協議して各氏共に姓の一字を改稱することゝなり、依て實珠寺門徒たる松林氏は松居氏に、大城寺門徒の植木氏は植本氏に、阿釋院門徒一色氏は一守氏と改稱したり、是に於て清重以來の松林氏は松居氏と改稱することゝなれり、左に松居一族分脈系圖、宗家、分家七家、分家の支家二家、支家より分れたる孫支家二家の分脈を明にし、而して後ち宗家以下各家の系圖を詳記す。

松居家の元祖下間家

松居氏の元祖は下間家なり、下間家は源三位頼政を祖とす、頼政の曾孫馬場兵庫頭宗重は常陸國眞壁郡下妻庄を領し依て下妻を姓とす、後ち下間に改む、承久中宗重親鸞聖人に隨ひ出家して蓮位房法阿と號す、爾後聖人に常隨し本願寺創立後その坊官となり子孫に世襲す、十九世の孫下間九鬼三郎仲臣氏今京都に住し傳來の系圖家寶等を所藏せらる、其系圖中松居氏の出自を明記すれば松居氏の祖先は卽ち下間家なり、因て卷頭先つ下間家の祖源頼政畫像、下間蓮位房木像、及び墓所、並に現主仲臣氏の肖像を掲げ而して後ち松居氏に及ふことゝせり、川流は源より發す本來を明にする所以なり。



元祖　源三位頼政卿自讃之壽像

畫者右京太夫藤原隆信

京都市　下間九鬼三郎氏所藏

下間蓮位房木像

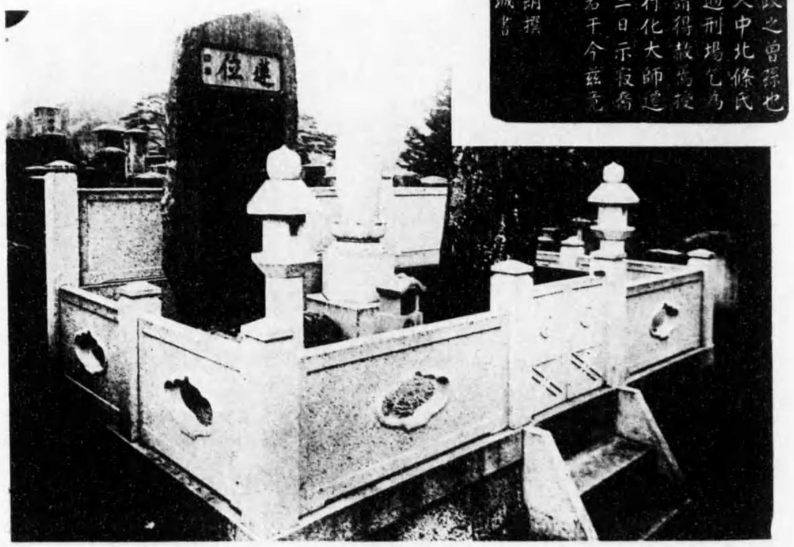
京都市下間九鬼三郎氏所藏

蓮位

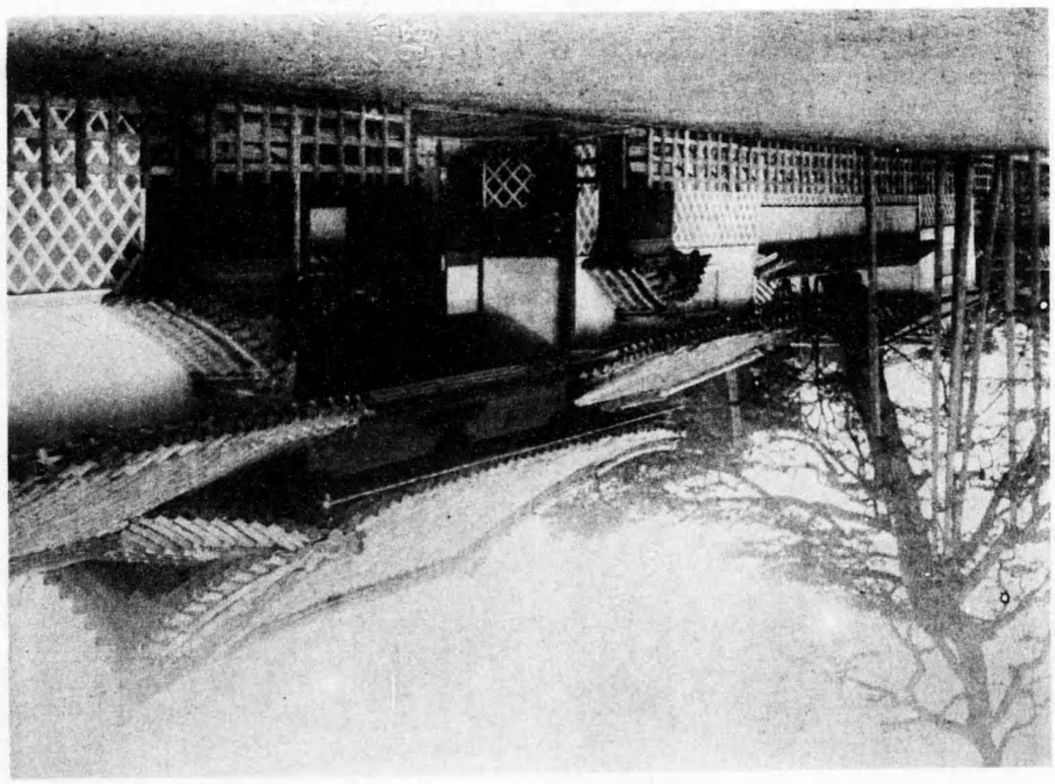
下間家祖馬場兵庫頭宗重清和源氏三位頼政之曾孫也
領常陸國真壁郡下妻一作下間因以為氏承久中北條氏
討其族頼茂宗重坐之將處死刑見真大師過過刑場乞為
弟子蓋以大師之母實頼政之孫乃為姻戚遂請得赦為授
法名法阿號蓮位房爾來常隨大師衆教誨鉢行化大師遷
化之後侍廟塔十數年弘安元年戊寅七月廿三日示寂裔
孫聘綿以至于今甞請建碑於本山本山賜金若干令茲竟
竣其工使余記之以示後昆云

大正六年七月　本願寺執行長利井明朝撰

記容連枝大谷尊由題額　赤松連城書



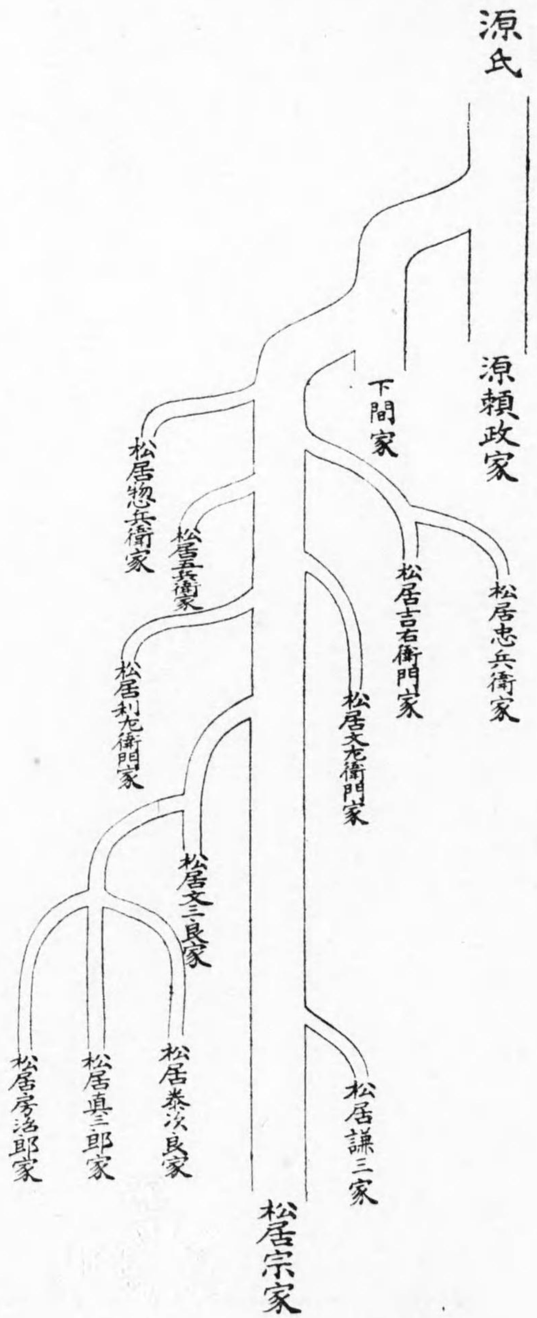
（京都西大谷）　碑建と所墓房位蓮間下（下）　文碑（上）



景之島本家間下

下間蓮位房十九世之孫　下間九鬼三郎仲臣氏肖像

松居家本支分流圖


源氏
源頼政家
下間家
松居忠兵衛家
松居吉右衛門家
松居文左衛門家
松居惣兵衛家
松居長兵衛家
松居利左衛門家
松居文三良家
松居恭次良家
松居真三郎家
松居房治郎家
松居謙三家
松居宗家

松居一族分脈系圖

下一色村移住後

- ○清重（下間頼清二男 初清基 天正四年下一色村移住 松林文右衛門 清重ト稱ス）
  - 清光（金右衛門後 文右衛門）
    - 清孝
      - 清政
    - ●吉右衛門（第二分家）
      - 吉右衛門
  - ●惣兵衛（第一分家）
  - 勘助
  - ▲忠兵衛（第一支家）
  - 清則
    - 清定
      - 清成
    - 清信
      - 清嗣（文次郎後 改儀兵衛 第六分家）
        - 清光（文三良）
          - 清長（文次郎）
        - ▲清安（眞三郎 第一支家）
          - ▲直次良
            - 新太郎（大阪住）
      - ●五兵衛（第三分家）
      - ●文左衛門（第四分家）

傳源三位頼政卿筆蹟

宗家　松居文右衛門所藏

●利左衛門第五分家

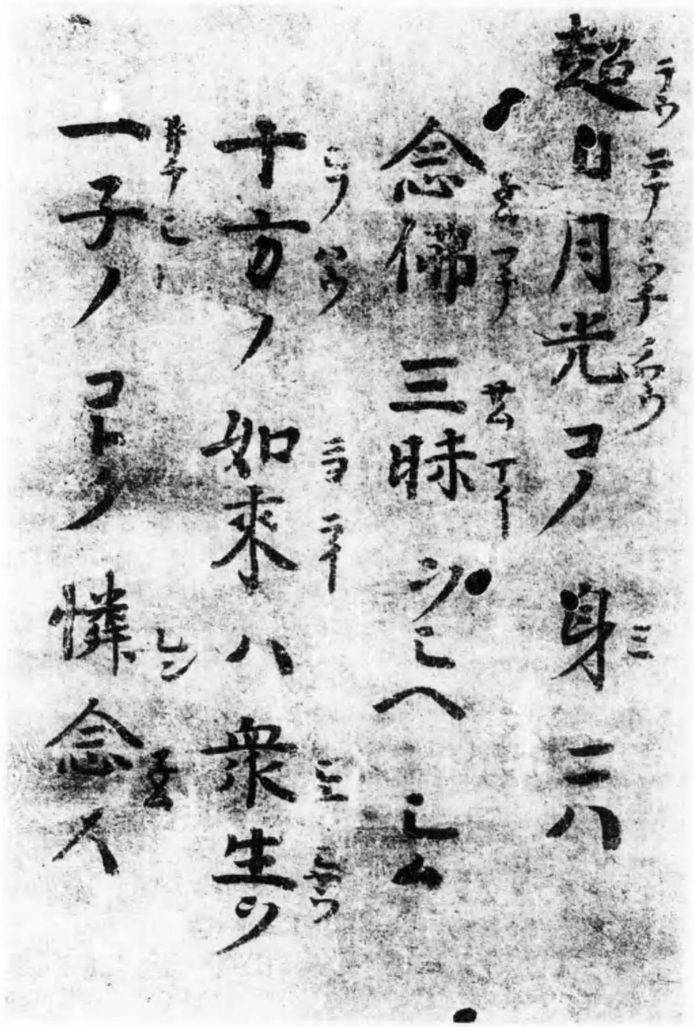
清經常次郎　清一一良現戸主宗家也

●清元謙三第七分家

■清忠泰次良第二孫支家大阪住

■清武房治郎父の隠居跡相續第一孫支家大阪住

以上宗家、七分家、二支家、二孫支家の系圖を左に家を別ちて詳記す、分家は宗家本家より分れたるもの、支家は分家の分家たるをいひ孫支家は支家より分れたるを云ふなり。



本願寺九世　實如上人眞筆和讃

宗家　松居文右衛門所藏

松居家に存する顯如上人の手簡

元龜元年より織田信長と對抗せし本願寺顯如上人光佐は天正八年三月勅命により平和したり、當時上人が諸國門徒中に送りし消息松居宗家に存す、全文を寫出し置く。

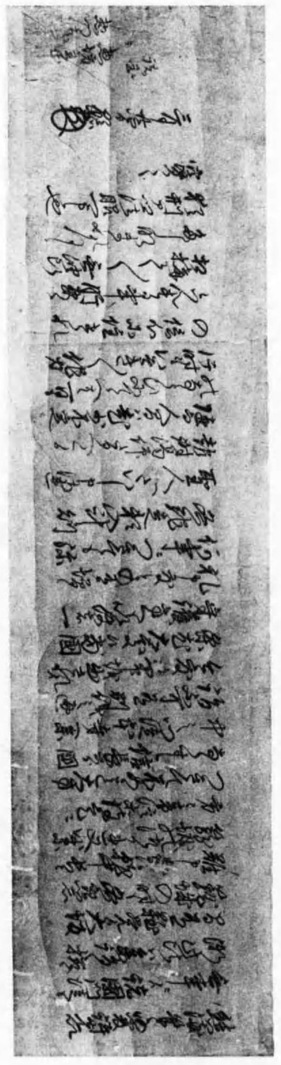
松居一良文書

態染筆候、仍爰許、先以無事に候、諸國門徒も漸、此頃は參詣候樣候間有難覺候、大坂籠城之時も、各々懇志難申盡候、就中、長々籠城之つかれ、又はいまに方々音信等、彼是につきて不如意大方ならず候、信長公より、國中の門徒本寺へ參詣不可有別儀之通、今度朱印を出され候條、尤大慶候、當國守護方へも以使者一禮申度との有增候、何事につきても彌馳走頼入斗候、則聖人へたいし申され、報謝渴仰たるへく候、隨而人間は老少不定のならひにて候はゝ、一日も片時もいそき〳〵他力の信心

に住せられ候はんする事肝要候、相構て〳〵無油斷たしなまれ可ゝ給候、猶刑部卿
法眼可ゝ申候也、穴賢々々、

三月二十四日　　顯如　花押

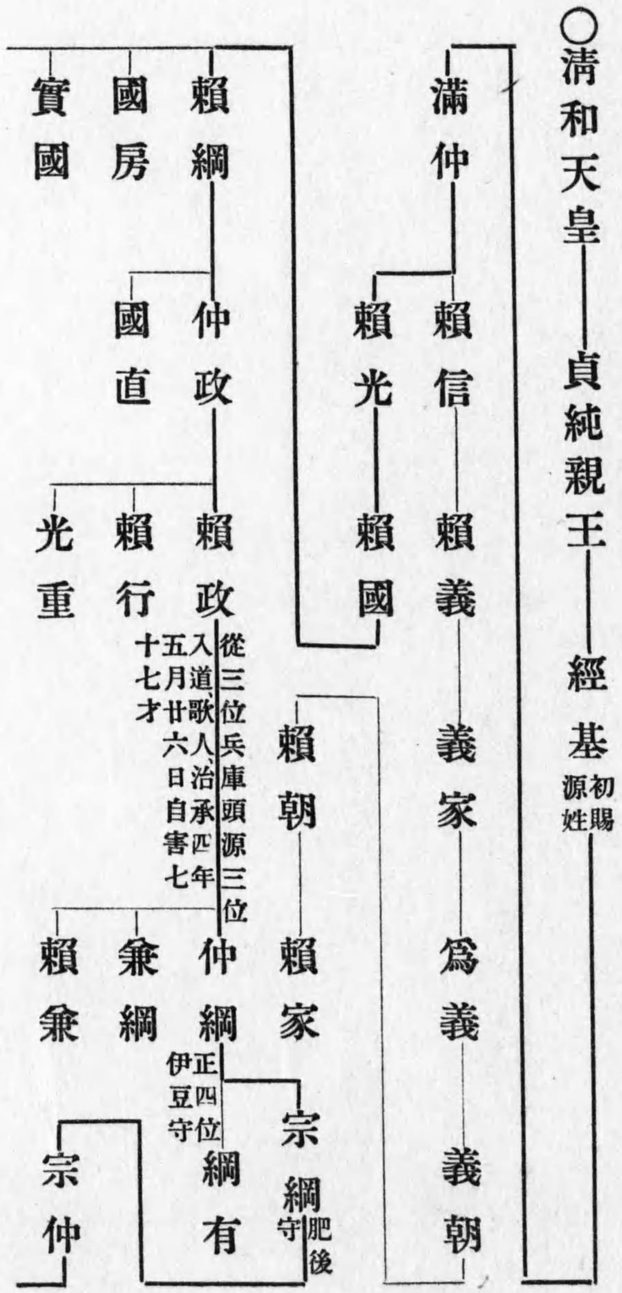
諸國
惣坊主中
惣門徒中



息消人上如顯　世一十第寺願本
藏所門衛右文居松　家宗

○松居宗家系圖

清和源氏　紋所　三ッ輪　笹龍膽



賴實

賴資

賴弘

宗重 下間家祖 常陸國下妻庄ニ住ス、親鸞聖人ノ巡錫ニ遇ヒ其弟子トナリ、下間蓮位房法阿ト號ス、弘安元年七月廿三日卒、

來善 丹後守

仙藝 美濃房 性善

長藝 讃岐守 識善房

慶乘 丹後守

慶阿 丹後守 蓮慶

玄英 丹後守 法橋

賴永 源左衛門、本願寺坊官下間刑部卿家、越後守、

光宗 駿河守五郎左衛門尉 天文二十二年二月十四日卒、法名超然房善宗下間少進家初代

賴清 光宗四男、筑後守 弘治三年、九月、廿七日卒、六十三歳法名淳心房正善

賴善 源八 下間宮内卿家

述賴 淨歡房理乘、筑後守法橋、童名源次、天正三年八月十五日、越前白木戸討死四十二歳、

○清重 松居家元祖 但馬守清基、天正四年一向一揆ニヨリ江州愛智郡下一色村ニ潛居、後チ松林文右衛門清重ト改稱、同地ニ住ス、村ニ運命水神社アリ清重常ニ崇敬ス、寛永七年庚午九月二十九日卒ス、法名玄可、是ヲ松林氏(明治四年改姓)松居氏ノ元祖トス、妻某釋妙可、同年十月二十日卒ス、

二代 清光 金右衛門、庄屋役、寛永五年三月、寶珠寺寺地寄附、殁年詳ナラズ、法名敎惠、

○惣兵衛 松林氏ヲ分家シテ一家ヲ新立ス、系圖別記ス、(第一分家)

三代 清孝 文右衛門、元祿元年庄屋役トナリ寶永五年ニ至ル、寶永五年三月二十七日卒、法名正敎、妻ハ大澤村某氏ノ女、貞享二年四月十九日卒ス、子ナシ、法名妙慶是

ナリ、
後妻ハ愛知川宿某ノ女、享保十八年八月十八日卒ス、法名妙誓、

某　寶永六年八月三日卒、法名正仙、

二男　寶永七年正月二十六日卒、法名正西、

四代
清政　文右衛門、寶永六年ヨリ庄屋役、享保八年ニ至ル、寶暦六年十月十二日卒ス、法名了悅、
妻、光、冲村、伊兵衛女、享保八年八月十五日卒ス、法名妙秀、後妻百濟寺村、山本氏女、安永元年九月十八日卒ス、法名妙悅八十四歳、

某

○吉右衛門　分家ス、系圖別記　第二分家

女　享保三年八月十四日卒ス、法名妙讃

女　同年八月十六日卒ス、法名妙蓮、

五代
清信　文右衛門、始文次郎、享保十一年三月生、寶暦九年八月年三十四歳ノ時ヨリ酒造業ヲ開ク、安永三年十一月庄屋役、寛政五年八月迄二十年勤續、文化元年十二月十一日卒ス、年七十九歳、法名了惠、妻安孫子村、伴戸新五郎妹ひさ、寛政五年十月二十九日卒五十八歳、

○五兵衛　分家、系圖別記　第三分家

○文左衛門　分家、系圖別記　第四分家

○利左衛門　分家、系圖別記　第五分家

よつ　讀合堂村、彌兵衛ニ嫁ス、正德五年三月十一日卒ス、法名妙惠

女　享保九年七月二十日卒　釋名妙圓

清豐　新次郎寶暦十年生ル、長シテ彦根西村氏養子、

六代
清則　常次郎、後源八、寶暦十二年生、寛政八年庄屋役、天保四年迄三十七年間勤續中、押立山山論アリ、文政十一年九月江戸ニ下リ訴事ニ從フ、年六十七歳ナリ、天保四年三月庄屋役許サレシ時、領主ハ多年ノ功勞ヲ賞シ玄米貳俵ヲ褒賞ス、清則其賞米ヲ村内ニ分配シテ領主ノ恩ヲ分テリ、年凶年ニシテ村人等殊ニ之ヲ喜ベリト、天保八年正月十三日卒ス、年七十六、法名了喜、妻ハ今在家村、岸善兵衛女りよ天保十年正月十六日卒ス、年七十一、法名妙喜、

の　ゑ　明和二年生　勝堂村、西堀久左衛門ニ嫁ス、寛政七年七月二十三日卒、年三十三、法名妙貞、

清元　金次郎、後文藏、八幡町納屋又四郎養子、

ひ　ち　寛政七年十月十五日卒、年二十四歳、法名智了、

り　ゑ　天明二年四月十日卒、法名貞信

や　そ　寛政八年七月四日卒、十七歳、法名了安、

七代
清定　文右衛門、天保十四年庄屋役トナル、同十五年九月二十八日卒、年五十、法名了乘、妻ハ讀合堂村、西澤勝左衛門ノ女、文政九年ニ迎ヘリ、明治十五年十月八日卒、八十二歳、法名貞良、

清良　寛政九年生、新次郎、同十一年彦根西村氏養子、

さ　わ　今在家村、岸善右衛門ニ嫁ス、

ひ　の　同村、岸善次ニ嫁ス、

り　の　文政十年二月十八日卒ス、法名淨法、松林忠兵衛ノ室、

い　さ　嘉永元年十月十一日卒ス、法名妙岱、年三十八、

八代
清嗣　文次郎、後改儀兵衛、文化十年生、天保十一年十一月分家、系圖別記、第六分家、兄清定歿後、嗣子文之助幼年により宗家の事を管す、

九代
清成　始文之助、後文右衛門、明治二年下一色村戸長トナリ多年勤續、押立神社氏子總代、押立山經營管理等ニ盡ス、又明治二三年ノ間同族文三良ト喜右衛門、惣

助、四人共同シテ曼荼羅製作ニ従事ス、費ス所二千百三十七兩三分、後之ヲ京都泉涌寺ニ寄附ス、明治四十一年四月二十七日卒、七十歳、法名顯彰院了慶、妻ハ讀合堂村、外川半左衛門ノ女りを、大正十三年十二月八日卒、八十三歳、法名妙壽、

某　天保五年正月十日卒、釋了善、

女　文政十一年正月二十一日卒、釋貞了、

のゑ　小田苅村、村松三郎兵衛ニ嫁ス、明治四十年五月八日卒、釋榮阿、八十六歳

りか　冲村、森嘉右衛門ニ嫁ス、大正十一年七月二十七日卒、釋了傳、八十八歳

拾代

清經　常次郎、明治三十年九月住宅改築成ル、明治三十三年西押立村村長就職、同三十九年同村長再任就職、大正七年一月二十日、北海道札幌ニテ死亡、法名了賀、妻今在家村、岸善兵衛二女みゑ、明治二十七年五月二十九日卒、釋智曉、後妻中宿村、辰巳藤七長女とみ、明治九年一月十七日生、

貞治郎　明治六年一月十六日卒、釋教童、

○

謙三　分家ス第七分家系圖別記

清宗　源四郎、大正二年七月十六日卒、釋正因、妻中宿村、辰巳藤七五女すて、清宗死亡後復籍、後更ニ同族房治郎後妻ニ嫁ス、

清一　一良、明治三十九年七月二十一日生、本家亡常次良養嗣子トナル、

みゑ　明治四十二年七月十三日卒、釋妙曉、

田鶴子　明治四十三年七月十日生、

十一代

清一　一良、實ハ常次郎ノ四弟、源四郎ノ長男ナリ、常次良子ナク、依テ其遺蹟ヲ嗣グ、松居宗家ノ現戸主ナリ、明治三十九年七月二十一日生、

松居宗家　家祖　清重（基清初）畫像

宗家二代　松居文右衛門清光畫像

宗家三代　松居文右衞門清孝畫像

宗家四代　松居文右衞門清政畫像

宗家五代　松居文右衛門清信畫像

宗家六代　松居源八清則畫像

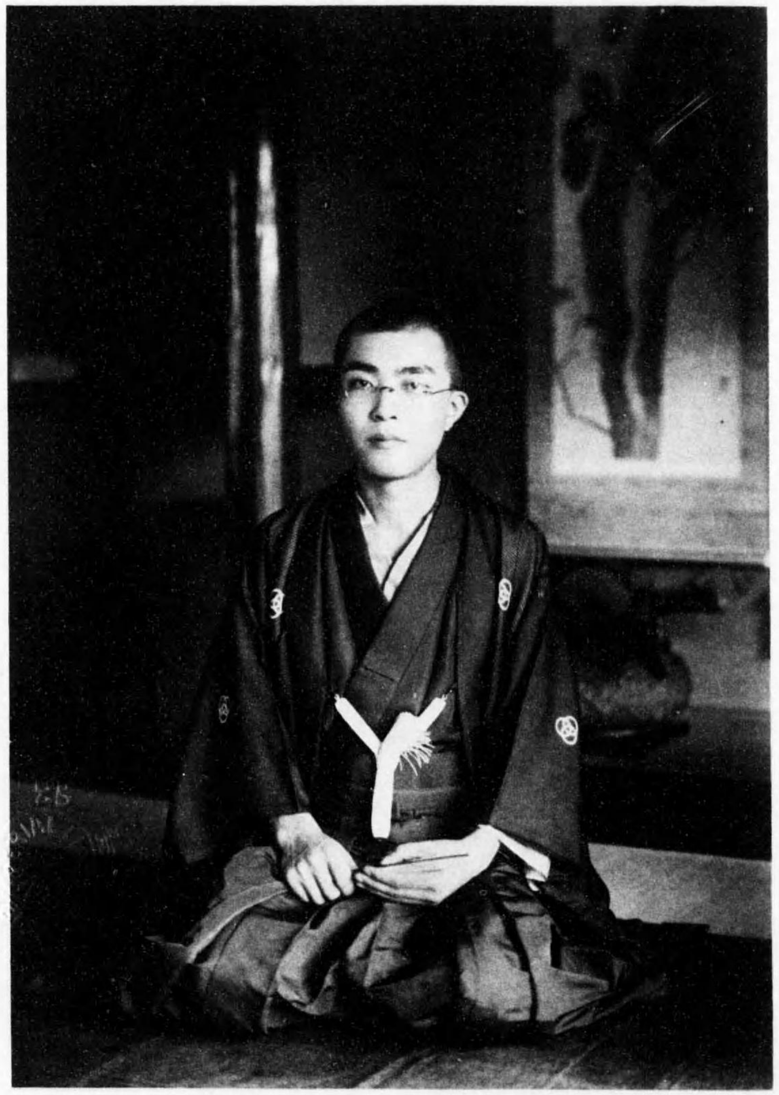
宗家七代　松居文右衛門清定畫像

像畫嗣清衞兵儀居松　代八家宗

宗家九代　松居文右衛門清成肖像

宗家九代　松居清成之室　りを子肖像

宗家拾代　松居常次良清經肖像



像肖一清良一居松　主現代一拾家宗

○松居氏第一分家系圖

第壹分家祖
○惣兵衛 家祖清重次男也、寛永七庚午年分家、享保五年十月二十一日亡釋順智、

二代
惣兵衛 寶暦九年八月六日亡、釋玄宗、

三代
惣兵衛 天明四年三月二十七日亡、釋宗專、

四代
惣兵衛 寛政十二年七月二十四日亡、釋智海、

五代
惣兵衛 文化三年七月十三日亡、釋宗入、妻妙信、文化十年六月二十七日亡、

六代 惣兵衛 安政四年九月二十五日亡、釋宗圓、

さよ 一色善吉ニ嫁ス、

七代 惣兵衛 慶應二年九月十五日亡、釋智曉、絶家、

宇平 彦根町桶屋町移住、紺屋を營む、

すみ 下一色村、久兵衛に嫁す、

○一色善吉 明治九年二月二十七日亡、七十五歲、妻六代惣兵衛妹さよ明治二十五年一月十五日亡釋尼貞明

宇平 明治十六年十二月二十五日亡、五十一歲、妻七代惣兵衛弟、彦根桶屋町紺屋、宇平女てつ大正十年一月十五日亡、七十八歲釋尼智章、

たつ 長村、黄地利平ニ嫁ス、

ちよ 栗田村、珠玖市平ニ嫁ス、大正十四年三月十二日亡、

清澄 捨次郎、後改宇平、明治五年九月一日生、妻吉右衛門長女すが、明治八年十二月二日生、

つま 平柳村、太田政平ニ嫁ス、

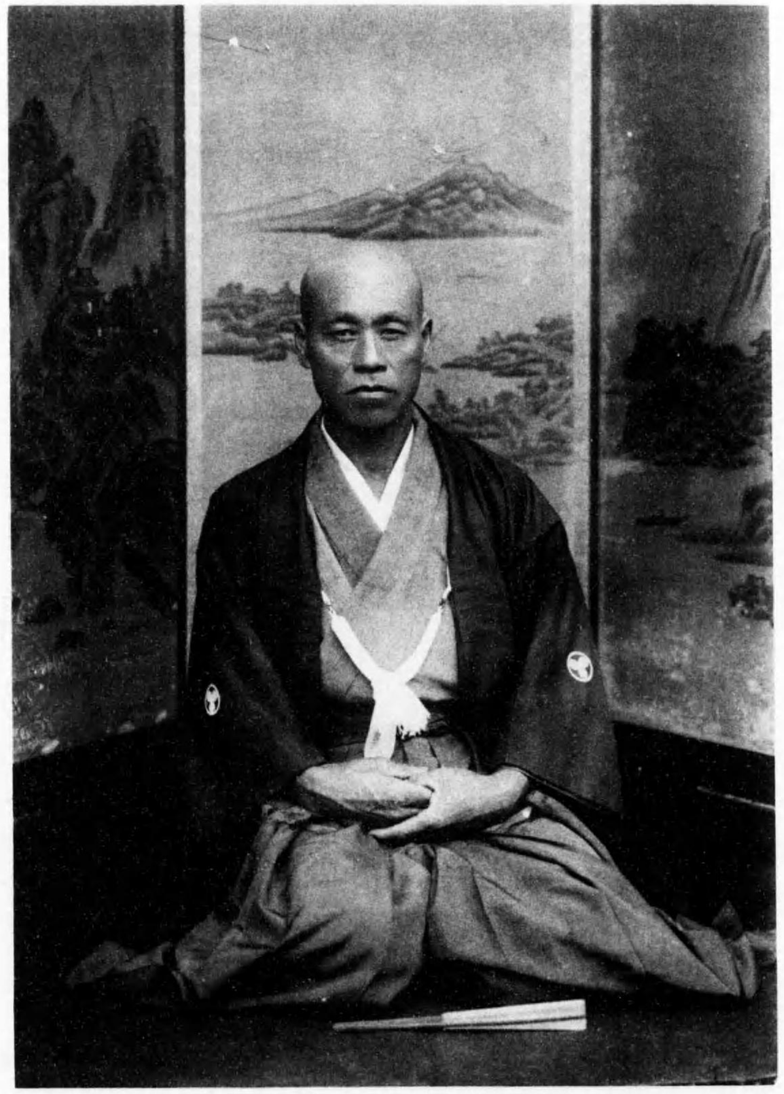
清保 善太郎明治三十一年五月二十三日生、妻文左衛門三女こと、明治三十四年四月十日生、

清永 宇三郎明治三十五年三月十四日生、

のぶ 愛知川町市村、青木長平ニ嫁ス、

正雄 大正十三年一月十日亡、釋正善

尚良 大正十四年二月四日生、



第一分家　一村宇平清澄肖像

○松居氏第二分家系圖

第二分家祖
○吉右衛門　三代清孝之五男也、寶永五年分家、寶暦二年三月十七日亡、釋覺圓、

二代
吉右衛門　明和五年二月四日亡、釋敎圓、

三代
吉右衛門　寛政六年七月四日亡、釋敎春、

四代
吉右衛門　享和元年十一月廿五日亡、釋敎圓、

五代
吉右衛門　文政十一年六月二日亡、釋敎證、

六代
勘助　天保十二年七月十六日亡、釋順信、
妻松居作平女、

忠兵衛　分家ス、系圖別記、

やそ　蚊野村、宇野吉右衛門ノ妻、

七代
文助　實松居文左衛門清秀二男、養子入家、明治十四年七月廿四日亡、
七十歳、釋諦道、

きぬ　蚊野村、宇野吉右衛門ノ妻、

りを　文助ノ妻、明治三年七月十七日亡、四十八歳、

八代
清道　吉右衛門初文吉、嘉永元年二月三日生、
妻のゑ、松居五平女、明治三十年二月二十日亡、四十七歳、釋智秀、

爲吉　文左衛門、養子入家、

こよ　冲村、森彌三郎ノ妻、

九代
清和　源之助明治六年十一月三十日生、
妻りの冲村、森彌三郎女、

すが　一村宇平ノ妻
明治八年十二月二日生

りを　百濟寺村、野村源五郎ノ妻、
明治十二年五月廿三日生

みの　南菩提寺村、吉田駒藏ノ妻、
明治十九年七月十日生

清尙　吉太郎明治三十五年四月十一日生、

きみ　明治三十八年一月廿九日生、

清嘉　爲吉明治四十年三月三十日生、

第二分家　松居吉右衛門清道肖像

文助　明治四十四年二月廿七日生、

捨次郎　大正二年七月廿一日夭死、釋勇哲、

信一　大正十年二月一日生、

○松居氏第二分家第一支家系圖

第二分家之第一支家祖

△忠兵衛 五代吉右衛門ノ二男也、明治十年三月廿二日亡、八十七歳、釋顯意、
妻りの文右衛門清則女、文政十年二月十八日亡、釋淨法、後妻しを、東圓堂村、
茂助妹、明治五年十月七日亡、釋貞元、

- 綱吉 明治元年十二月二十九日亡、釋智性、
- 二代 金三郎 明治十五年十一月廿四日亡、釋龍音、
妻みか、松居佐治兵衛女、嘉永元年八月十六日生、
  - 三代 榮藏 明治四十一年三月廿七日小笠原島ニ於テ亡ス、四十歳、
  - 兼吉 明治十一年八月十四日亡、
  - 某 明治十三年四月八日亡、釋智順、

しづ　明治二十一年七月二日生、
仙太郎室

四代
清雄　仙太郎、平尾村、木村捨吉長男、養子入家
明治二十年六月二十日生、

五代
忠兵衛　明治四十五年二月四日生、

ひで　大正二年二月一日生、

政市　大正三年十月十三日生、

みね　大正六年七月二日生、

ミツ　大正八年十一月二十六日生、

よし　大正十年三月十日生、

良吉　大正十三年七月二十三日生、

和一　昭和二年三月五日生、

第二分家第一支家現主　松居仙太郎清雄肖像

○松居氏第三分家系圖

第三分家祖
○五兵衛　文右衛門清政二男也、分家シテ一家ヲ建ツ、安永二年六月七日亡、釋順道、

二代
五平　天明四年十一月二日亡、釋了順、

三代
源右衛門　寛政十年二月四日亡、釋順誓、

四代
源右衛門　天保四年六月朔日亡、釋淨嚴、

五代
五平　慶應四年四月二十二日亡、釋願喜、妻まつ、同村清兵衛ノ女、明治三十年八月十三日亡、

源治 神崎郡金堂村、外村與左衞門店員、後別家、死亡年月不詳、

六代 **清吉** 大正六年十二月二十七日亡、釋龍音、
妻さつ、冲村、森伊三郎女、

源治郎 明治十七年一月二十八日生、
東京現住

伊之介 明治二十一年二月二十日生、
大阪現住

七代 **清之** 源造明治三十三年一月七日生、
祖家を繼ぐ

のゑ 明治十六年三月十六日早世、

第三分家現主　松居源造清之肖像

○松居氏第四分家系圖

第四分家初祖

○清方　文左衛門(宗家四代)清政三男分家一家ヲ建ツ、
寛政三年七月三十日亡八十八歳釋了圓先妻冲村利左衛門女寛延元年九月十二日亡釋明惠後妻中宿村羽田治右衛門女寛政六年十二日亡釋妙圓

二代

清康　文左衛門文政七年二月十七日亡七十五歳釋了誓
妻冲村森佐右衛門女寛政五年十一月二十四日亡釋妙誓

某　明惠所生　寛延元年九月六日亡

女　妙圓所生　寶暦九年十一月十八日亡釋妙信

女　同　安永四年二月十七日亡釋妙智

三代

清秀　文左衛門安政三年九月二十日亡七十五歳釋了受
妻神崎郡下日吉村山脇藤吉女天保十四年二月十二日亡釋妙嚴

某　寛政五年十一月二十二日亡、釋淨幻、

リヱ　池ノ庄村、磯邊六左衛門妻、

ちゑ　佐治兵衛妻、子ナシ

四代

源兵衛　明治二十六年八月二十日亡、七十五歳、釋了敎、妻いく、上八木村、上柳德右衛門女、明治二十五年六月朔日亡、六十五歳、釋明安、

文助　松林吉右衛門ノ養子トナル、

女　文化十四年二月十四日亡、釋尼玄智

いし　冲村、森庄平ノ妻、

みか　北蚊野村加藤林右衛門ノ妻、

すが　小池村、今村清兵衛ノ妻、

五代

清杁　第二分家七代文助二男、爲吉、養子入家、文左衛門ト改名、安政二年六月二十二日生、妻たみ、元持村吉岡五平女、元治元年五月十二日生、

六代

清素　清太郎、明治十七年四月二十二日生、妻せつ、元持村吉岡九平女、大正七年十二月二十二日亡、釋妙貞、後妻千代、松居直次良長女、

勘三郎　大正十三年八月二十七日亡、釋善可

清晴　光四郎、明治三十九年十一月七日生、

たき　冲村、森恒太郎ノ妻、

まき　明治二十八年九月二十日卒、六歳、法名妙宗、

つる　西菩提寺村、小林留吉ノ妻、

こと　一村善太郎ノ妻、

第四分家　松居文左衞門清朴肖像

晴江　大正四年七月十三日生、松居謙三養子、

寛　大正十一年一月五日生、

信雄　大正十三年四月二十三日生、

第四分家現主　松居清太郎清素肖像

○松居氏第五分家系圖

第五分家祖
○利左衛門　文右衛門清政四男、一家分立
明和六年三月十日亡、釋了秀、

二代
太平　寛政六年六月十八日亡、釋了海、

三代
太平　文政三年四月二十一日亡、釋了行、

四代
太平　天保六年二月朔日亡、釋了證、
妻某慶應二年八月八日亡、釋妙喜、

五代
作平　明治十一年十一月十六日亡、釋順道、
妻さき、下里村、藤井重五郎ノ女、大正八年八月八日亡、釋妙果

伊三次　明治二十二年一月廿一日亡、釋了然、

女　慶應四年十月九日亡、釋貞喜、

よの　明治十五年三月十三日亡、釋貞林、

六代

作平　始市松、大正十三年十月二十一日亡、釋皆了、無子、
妻ゆき、野々目村、野々村丈助長女、

七代

清實　長三郎、實小田苅村、村松三郎平三男、養子、
明治三十七年十二月一日生、

第五分家　松居長三郎清實肖像

○松居氏第六分家系圖

第六分家祖
○清嗣　初文次良、後儀兵衛ト改ム、天保十一年十一月分家ス、同十五年兄清定死亡、子息文之助幼少ナルヲ以テ亡兄ノ遺言ニヨリ宗家ノ事ヲ管シ、弘化四年八月ヨリ下一色村庄屋トナリ、文久三年迄勤續ス、退役後宗家ヲ文之助ニ返シ分家ニ歸ル、明治六年七月十三日亡、六十一歳、釋了觀、妻冲村、森嘉右衛門ノ妹、りう、明治十七年四月二十三日亡、六十六歳、釋貞了、

二代
清光　文三良、萬延元年六月相續、大正四年三月十六日亡、七十五歳、釋了信、妻いそ、讀合堂村、西澤治右衛門女、大正八年九月八日亡、七十八歳、釋貞倫、

清安　眞次良、後眞三郎、明治三年春分家ス、系圖別記、第一支家

みき　中宿村、辰巳藤助ノ妻、嘉永七年二月十五日生

金次良　明治元年七月十日夭、三歳、

三代

清長　文次良、明治元年二月六日生、
妻そと、畑田村、中村喜平妹、

金次良　明治三十年九月十九日亡、釋了哲、
妻ゑい、中宿村、辰巳藤七女、

慶治郎　明治十六年七月二十六日亡、釋了覺、

ひの　明治五年九月二十三日亡、釋妙誠、

みき　小田苅村、村松宗與吉ノ妻、明治三十九年九月四日亡、釋誓唱、

はつ　松居房治郎ノ妻、

ひの　平柳村、太田龜藏ノ妻、明治二十一年八月二十三日生

ぬ　明治三十年八月四日生、愛知川町中宿、大橋善彌に嫁す、

清憲　良三、明治三十八年五月五日生、

清行　桂三、明治四十年六月十九日生、

道三郎　明治四十二年八月二十五日生、松居謙三嗣子トナル、

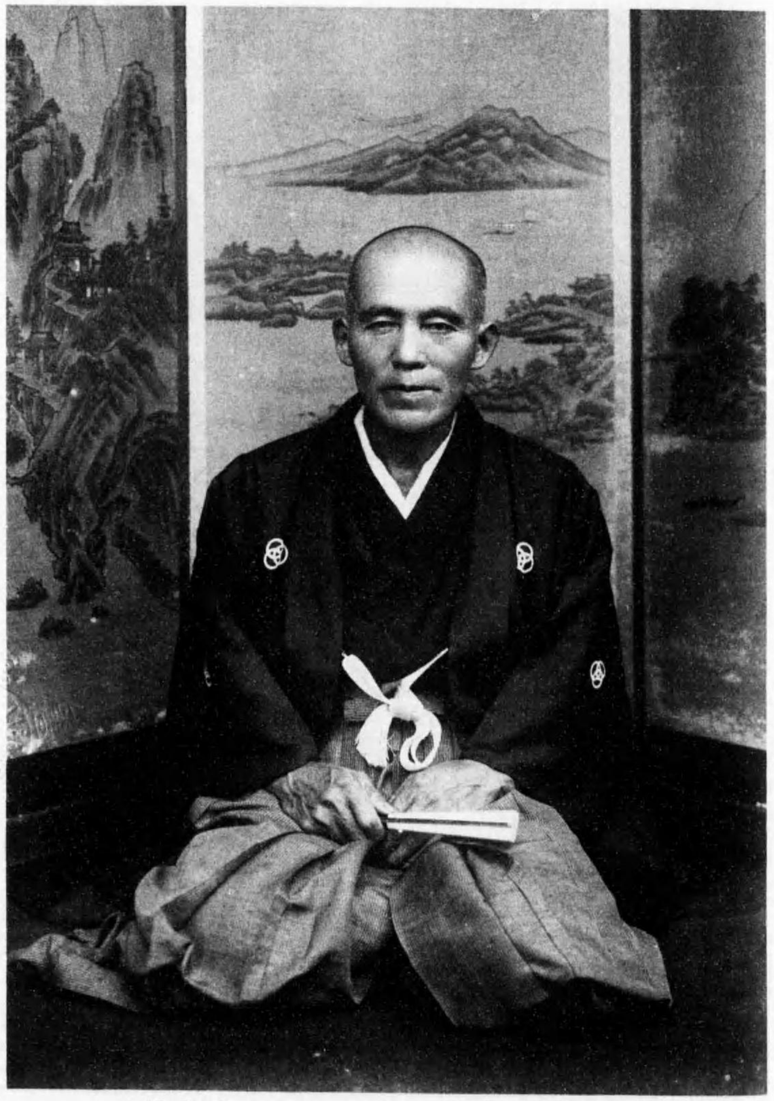
金次郎　大正元年八月五日亡、釋弘宣、

外次郎　大正二年一月十三日生、

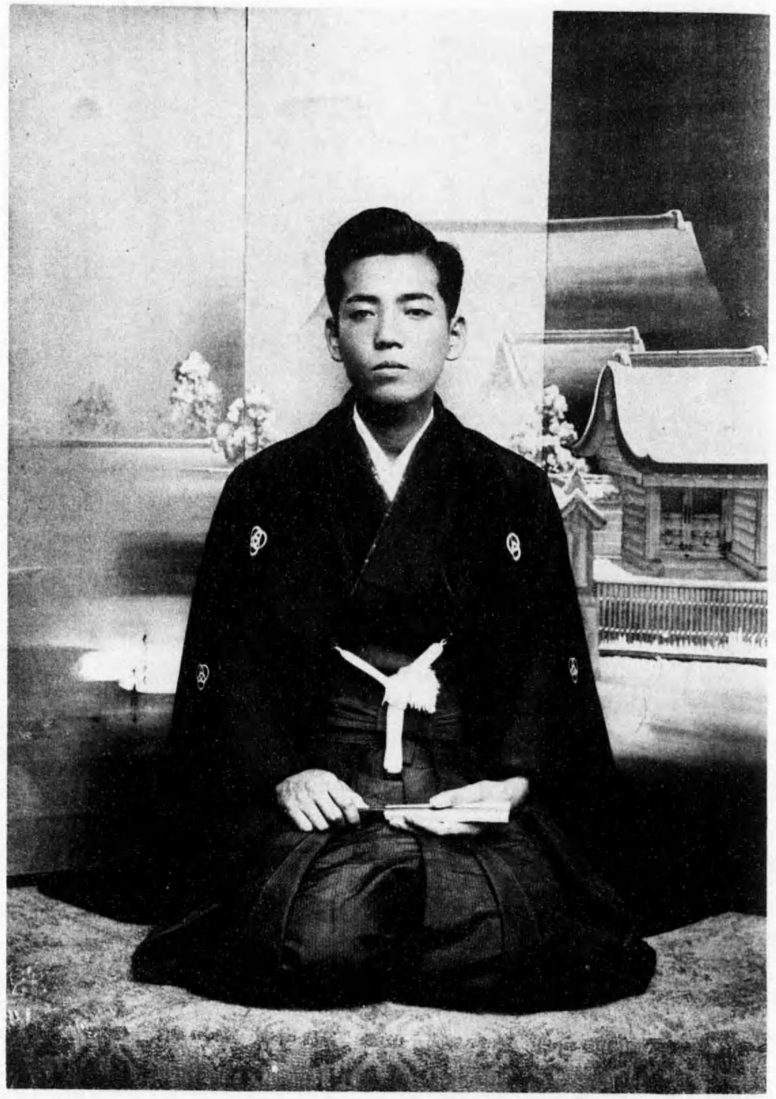
とき　大正四年八月二十一日生、

第六分家二代　松居文三良清光肖像

第六分家松居清嗣の女　みき子肖像



第六分家現主　松居文次郎清長肖像



第六分家松居清長嫡子　良三清憲肖像

○松居氏第六分家第一支家系圖

△第六分家第一支家祖
清安　清嗣次男也、初眞次良、後眞三郎、弘化三年二月二日生、明治三年別家ス、是ヨリ先キ文久三年亥、十月彦根藩ハ領内ニ令シ炮術傳授生ヲ募ル、下一色村ニモ其令アリ、庄屋文三良村民中ニ希望者ヲ募リシモ應スル者ナシ、依テ眞三郎ヲシテ其募リニ應セシム、眞三郎、翌元治元年正月彦根ニ出デ炮術ヲ練習ス、年俸米壹石ヲ給セラル、眞三郎其俸米ヲ以テ鐵炮ヲ求メ練習ス、翌慶應元年五月朔日、大筒方手傳ヲ令セラレ、苗字帶刀ヲ許サレ、增俸米壹石ヲ給セラル、當年ノ記錄中ニ左ノ文アリ、（後記）
明治三十七年一月三百三十二番地ニ分家ス「同四十一年一月十六日亡釋了誠、六十三歳」室ハ中宿村辰巳藤助女みゑ、嘉永七年二月十五日生、昭和二年二月二十三日亡、晃德院釋妙了、

（一）○文久三年亥十月より村方にて鐵炮稽古に罷出候樣被仰渡に付、村中相談致し候處、外より出候者無之に付、無據眞三郎遣し申候、但し年々壹石つゝ頂戴被仰付候、

（二）○　拜借仕證文之事

一六百八拾目　　拜借人眞三郎

但し利足年八朱

右は炮兵相勤候に付、新炮所持仕度候に付、難郷御仕法金之内件之通拜借仕候處實正也、然る上返上納之義は頂戴仕居候壹石を以、元利年々十二月十五日限、無相違上納可仕候、尤元金御入用之節は本人に不抱、引當丈夫に取置候間、村役前より急度上納可仕候、爲後證文如件、

文久四年
子正月三十日

愛知郡下一色村
庄屋文　三　良㊞
横目傳　　平㊞
組頭仁右衛門㊞
惣代吉右衛門㊞

御代官様

(三)

指上申請書之事

下一色村
眞　三　郎

一私義炮術稽古出精仕候に付、今朔日より被召出、大筒方手傳被仰出、格別之思召を以て一代切、苗字並帶刀御免、增雜用壹石被下置、難有仕合に奉存候、依之右被仰渡之通、御用之筋大切に相勤可申、此段御請書奉指上候處仍而如件、

慶應元年
丑五月朔日

愛知郡下一色村
眞三郎㊞
庄屋　文三良㊞
横目　傳　平㊞

御奉行様

干時 渡邊彌五左衛門樣
在々附 平居彌五八樣
御代官
今景源八郎樣
溝江彦右衛門樣

元〆筆頭 松居常五郎
森十右衛門
元〆同 山口三郎平
野塚惣次

二代
清隆 直次良、大正六年五月十日亡、四十七歳、釋了惠、
妻冲村、森半三郎二女、この明治三年十月十一日生、
兼治郎 明治九年四月二十日亡釋了證
清忠 泰次良、分家第二孫支家祖、明治八年十二月十六日生
清武 房治郎第一孫支家祖、父清安ノ隱居ヲ相續明治十二年三月十八日生
しげ 明治十六年十一月十七日生、松居謙三妻

三代
清篤 新太郎、明治二十三年五月十日生、大正七年五月大阪市北區末廣町ニ商店開業、八年十二月伊勢町移轉、昭和二年三月地下町ニ移轉、
妻 島川村、北川七兵衛ノ女、威子、大正十二年十月八日死亡釋了威、後妻三津村、鵜野幸三妹たか、明治三十年六月九日生
はま 明治二十五年四月九日亡、釋智現、在世八日、
清次 半次郎、冲村、森半三郎養子、明治四十二年四月十二日生
千代 明治二十七年六月二十四日生、松居清太郎ノ妻、
清英 英一、明治三十八年三月二十八日生、
はま 明治三十五年三月二十四日生、平松村、西澤耕一ノ妻、
清典 祐三郎、明治四十五年六月三日生、

第六分家第一支家之祖　松居眞三郎清安肖像

松居眞三郎清安之室　美惠子肖像

第六分家第一支家　松居直次良清隆肖像

第六分家第一支家現主　松居新太郎清篤肖像

○松居氏第六分家、第一支家、第一孫支家系圖

第六分家、第一支家、第一孫支家祖、

○清武　房治郎、父清安三男也、明治十二年三月十八日生、
清安老後隱棲ノ跡ヲ相續シ一家ヲ立ツ、明治三十七年十月、大阪市移住、兄泰次良ト共ニ商業ニ從事シ株式會社松居商店ヲ創立ス、業務逐年盛大、現在ノ住宅ハ西成區柳通一町目ニ在リ、
妻松居文三良三女はつ、大正九年一月十八日亡、釋貞園、三十七歳、
後妻愛知川町中宿、辰巳藤七五女すて、明治十八年五月十一日生、

- 清春　光三郎、明治四十一年三月二十六日生、母松居氏
- 清恒　正二郎、大正元年十二月九日生、母同上、
- ふみ　明治三十七年七月三十日生、母同上、神崎郡八幡村大字今市居安彌ニ嫁ス、
- 節子　大正三年十一月七日生、母同上、

第一孫支家現主　松居房治郎清武肖像

藤子　大正八年六月二十四日亡、釋了願、
母同上、

秋子　大正八年七月三日亡、釋了秋、
母同上、

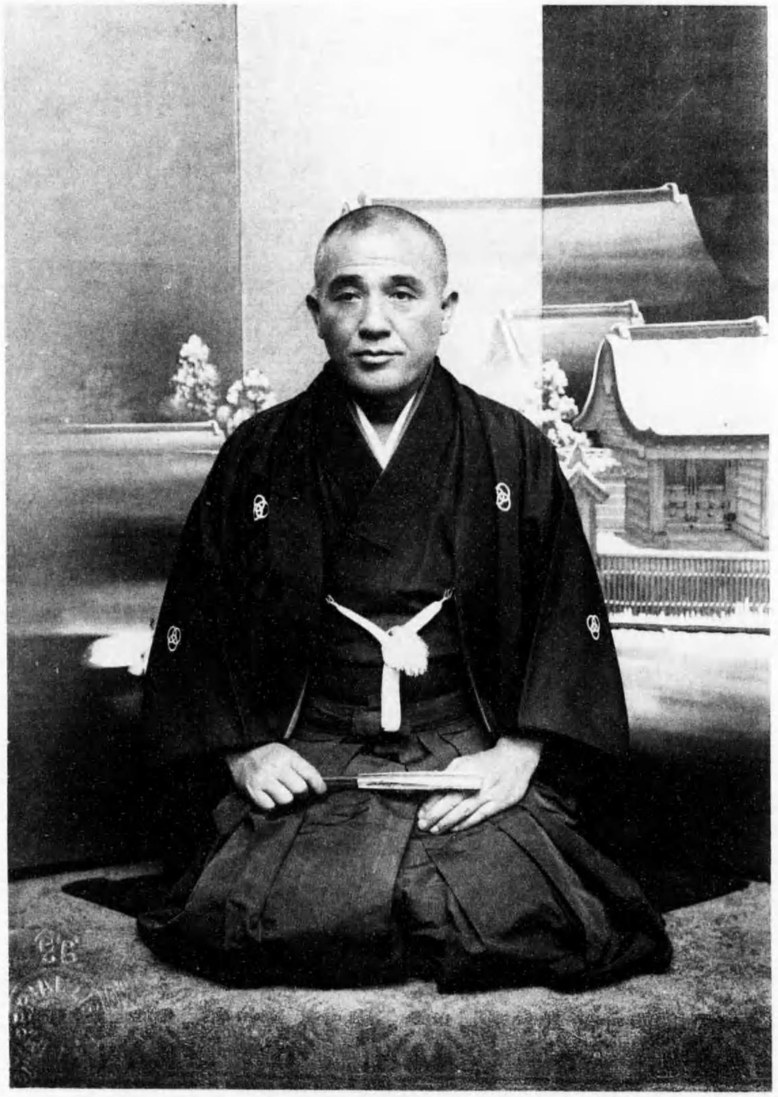
○松居氏第六分家、第一支家、第二孫支家系圖

第六分家、第一支家、第二孫支家々祖
泰次良父清安二男也、明治八年十二月十六日生

○清忠
明治三十七年十月、大阪市東區道修町ニ出テ商業開始、弟房治郎ト共ニ株式會社松居商店ヲ創ム、業務逐年發展、大正四年十二月六日、同市東區瓦町二丁目ニ移店ス、住宅同區同町、
妻豐椋村、大字小田苅、東澤與八二女つる、大正五年二月五日亡、
釋智順、三十二歳、
後妻、東押立村大字湯屋、田中增右衞門長女うさ、明治二十一年五月二十八日生、

美惠子
大正四年二月二十日亡、釋尼惠照、五歳、
母東澤氏、

正子
大正二年三月十五日生、
母同上、



第二孫支家　家祖　松居泰次良清忠肖像

○松居氏第七分家系圖

第七分家祖
○清元 謙三、明治八年十二月十日生、明治三十五年五月、下一色村、三百七十四番地ニ分家ス、
妻しげ、同族清安ノ女、

清明 道三郎、明治四十二年八月二十五日生、
同族清長ノ三男、養嗣子、

晴江 大正四年七月十三日生
同族清太郎清素ノ長女、

第七分家　家祖　松居謙三清元肖像

第七分家主松居清元之室　しげ子肖像

緣族　西村氏

西村氏は彦根城下傳馬町に住す、家號を茨木屋といひ商標は〆、紋所は梅鉢を用ふ、早くより松林家（松居氏）と緣故を結びし家なるも其來由詳ならず、文右衛門家記に元和九年五月二十六日彦根茨木屋元祖了喜死亡とあり、次に二代目西順寛永十八年二月二十七日卒此人開出今村より養子云々と記し、爾後寛文十一年八月五日二代目西順室明光卒、元祿三年四月十七日西村氏三代目淨榮卒去此人二代目西順の子、正德二年六月二十六日三代目室妙意卒去、享保十三年四月四日西村氏五代目敎專卒去三十九歳とあり、而して松林家と結緣の次第を記せず、結緣の家にあらざれば西村氏當主の死亡等を松居家舊記に記載する要なかるべし、按ずるに松居家祖但馬守清重の妻法名妙可の里にあらざる歟、

寛政六年松居文右衛門清信の子新次郎清豐西村氏市郎兵衛の嗣となり同家九代の主となる、清豐は寶曆十年に生れ當年三十五歳の時なりき、寛政十二年町代

役となり文政七年八月に至る、清豐男子無く源八清則の次男新次郎清良を養ひ嗣とす則ち十代の主なり、此くて清豐は天保四年十月十九日年七十四歳にして歿せり、清良西村氏に入り名を一郎平と改む、慶應四年三月七日卒す法名淨易、妻きせ長濱町增田傳助の女なり明治十七年七月四日七十二歳にして卒す法名貞竟、其後の系圖は坂田郡神照村大字國友川崎兵太郎氏によりて明となる、川崎氏は西村氏と重緣の家なるによれり、左に享保十三年以後の過去帳と一郎平清良以後の系圖を列記す、

死亡年月日	法名	俗名	摘要
享保十三戊申四月四日	釋教專		
同十五庚戌十月四日	同季海		
同二十乙卯正月二十九日	轉向智衍		
延享元甲子十二月十四日	釋道證		
寶暦四甲戌五月十四日	理通妙音		
同八戊寅正月十九日	達心道味		
安永五丙申四月十四日	寂心孩兒		
天明五乙巳七月十四日	釋了夢		
天保四癸巳十月十九日	同了易		
慶應四戊辰三月七日	同淨易	一良平	きせノ夫ナリ
明治十七甲申七月四日	釋尼貞竟	き せ七十二歳	長濱町增田傳助方ヨリ入嫁ス
同三十一戊戌三月十八日	自了濟正親	一良平六十三歳	淨易ノ長男ナリ

西村一良平 清良

長男一良平 明治三十一年三月十八日死去、天寧寺ニ埋葬法名正親六十三歳

長男長藏 東京市淺草區松葉町五四住居現今六十四五歳位

次男治良平 分家ス 明治二十五年三月三十一日死去、妻千代明治三十五年十月十一日死去釋尼貞順

長男政治郎 西村家ヲ破産後大阪ヘ出稼中大正十四年十一月四日死去、

清豐（文右衛門了惠二男）

長女多勢　坂田郡國友村川崎兵左衛門ニ入嫁大正六年六月十八日死去、七十七歳

次女壽　彦根傳馬町加久間傳治郎ニ嫁ス明治二十五年七月五日死去、

三女すて　伊香郡永原村大字大浦藤井長祥ニ嫁ス大正十四年三月二十六日死去ス

次男清親　治三郎明治十一年七月二十一日生、京都市上京區等持院南町ニ住居

長女ます　大正五年六月七日死去

次女しげ　明治二十五年三月坂田郡國友村川崎氏ヘ入嫁

す　明治三十年一月三十一日死去釋智順

清義　義一、大正二年二月二日生

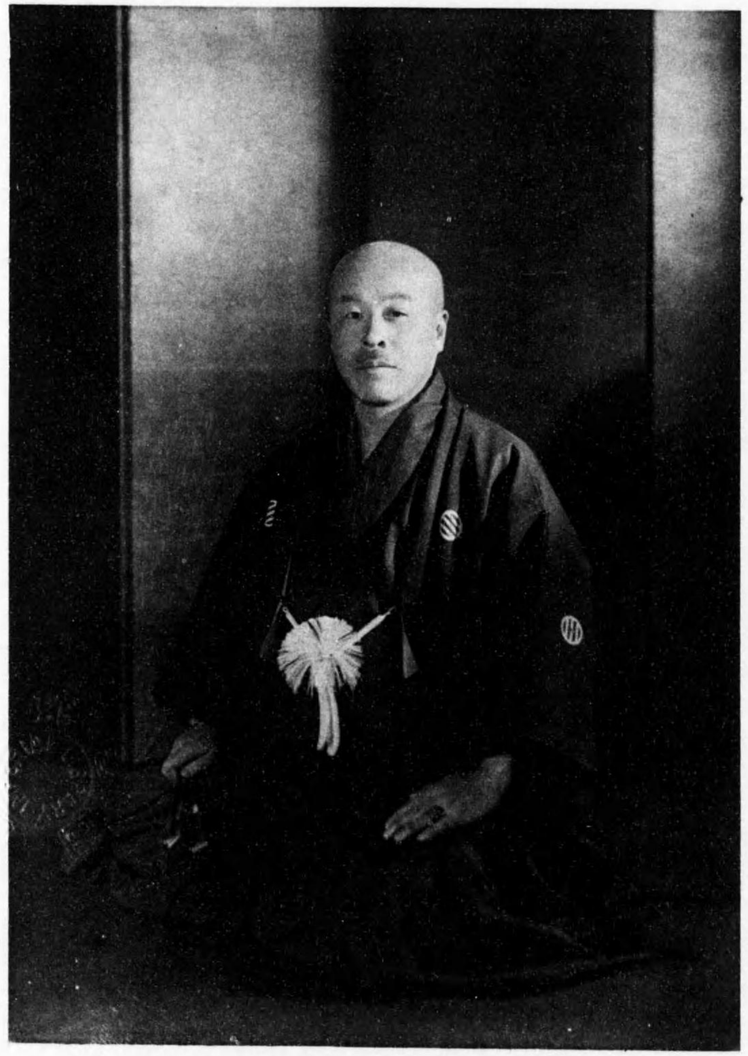
實　大正五年九月八日生

秀雄　大正六年九月十六日生

五男　大正十二年一月三十日生

千代子　大正十四年十二月三十日生

宗家六代清則孫　西村一良平氏肖像



西村治三郎肖像　孫曾則清代六家宗

宗家六代清則曾孫　川崎しげ子肖像

緣族　村松氏

村松氏は豐椋村大字小田苅に住す、松居宗家七代文右衛門清定の二女、のゑ、村松三郎兵衛に嫁し明治四十年五月八日八十六歳を以て卒す法名榮阿と號す、其子三郎兵衛現存す、緣族なるを以て肖像を挿入す、

宗家七代清定之孫　村松三良兵衛肖像

氏松村　村茄田小生所子ゑの女の定清

緣族　森　氏

一　森嘉平家

森氏は八木莊村大字冲に住す、松居宗家七代文右衞門清定の三女りか、森嘉右衞門に嫁す、大正十一年七月二十八日八十八歳にして卒す、釋了傳尼是なり、其子嘉平を經て孫源藏に至る、卽ち現戸主なり、

宗家七代清定孫　森嘉平肖像

氏森の村沖　生所子かり女の定清

二　森半三郎家

森半三郎は八木荘村大字冲に住す、半三郎一男一女あり、男亥之助家を續き父名を襲ふて半三郎と改む、女この松居直次良清隆の室となる、半三郎子無し、清隆の次男半次郎清篤を養ふて嗣となす、現戸主なり、

第六分家第一支家松居清篤弟　森　半次郎清次肖像

押立神社

押立神社は西押立村大字北菩提寺小字高波根野に鎭座す、押立五郷十七大字の產土神なり、火產靈命、伊邪那美神を祭る、社傳に火產靈命は太古押立山三瀨嶽に天降あり、伊邪那美命は神護景雲元年加賀國白山より遷御ありしが、天元元年神異ありて下一色村文屋康兼の邸に遷宮し僅かに半年にして現在の地に移宮、建保三年順德天皇の勅により押立客人二所權現と改稱す云々と見ゆ、明治以前は客人大明神の社名高し、客人神は日吉山王七社中の一神なり、愛知郡には白河、堀河兩天皇の御代より日吉社領に寄進せられし地多く、其面積四百數十町に亙りたれば之を上下に二分し二人の地頭を置きて支配せしめたり、文屋某はその一人なり、日吉社領の地に日吉の神を分祀するは莊園時代廣く行はれし所なり、淡海溫故錄に「押達庄は比叡山客人宮ノ氏子ニテ」云々と記さるは古傳を記するものなり、されば當社は押立山の明神と山王七社中の客人神とを合祀し依て客人

權現社、又押立二所大明神と稱したり、大永四年三月二十六日の銘ある社藏鰐口に「押立保客人宮鰐口也」と刻し、又享祿二年三月二十五日當社々前に千部經讀誦ありし時の板札銘文に

近江州愛智郡、押立保、
客人權現、寶前、千部經所

云々と記し、百濟寺より四十五人、金剛輪寺より二十人の僧衆來り大法樂あり、讀誦終了後猿樂五番ありしを記す、又應安六年卯月二十八日の棟札存す其銘文に、

當地頭殿中務少輔入道沙彌行照　諸從眷屬牛馬等安穩泰平成就圓滿故也
並左衞門尉藤原盛貞
當神主大伴佳延　並鄕々村々庄官番頭御百性等殊至任剝人下里沙彌蓮乘一色沙彌正信
當如法經聖金剛佛子實豪
當大工藤井貞純
同大工藤原國光
應安六年卯月二十八日敬白

と列記され地頭二人、神主如法經導師の名等を列記し、下里の人蓮乘、一色の人正信等特に寄附の厚かりしを記す、永祿十年卯月三日佐々木家の寺社奉行より當社神森の樹木伐採を禁ぜし折紙あり、天正十四年三月領主日根野半左衞門高吉より當社神主の諸役を免除せる文あり、古へより一庄の大社として祭禮嚴重に行はれ古への地頭たりし文屋氏は後に神主となりて世襲し今に子孫相續す、文屋氏は世々一色村に住し戰國時代以後文屋大藏丞の名を襲ふ、現在社地境内東西三十二間南北六十八間あり、古へは三町二段五畝歩の社地諸役免除地なり、明治二十年十月内務省は保存金百五拾圓を當社に下附す、本社々殿は三間社流れ造りにして明治三十五年四月十七日特別保護建造物に指定あり、又四脚門は入母屋造檜皮葺なり明治四十四年四月七日特別保護建造物に指定せらる、現在社格は縣社なり、松居家代々產土神として尊崇する社なり、

押立神社大祭古式大渡りと松居清光

大正元年は押立庄の大宮押立神社六十一年目に執行さるゝ古式大祭に相當し、春來各郷の氏子は祭事に鞅掌す、此時乘先番は大字平松にて、囃し込は翁之郷（南菩提寺、大澤、）送り頭幣之郷（下一色、今在家、平松、中一色勝堂、）當番たり、惣渡り子五百二十六人の大勢なり、其中大澤、今在家、平松の二百三十九人は平松の人横田與左衛門教師となり、勝堂、南菩提寺、下一色、中一色、二百八十七人は松居文三良清光教師となり、共に古式の動作を教授し、連日連夜の練習を重ね四月二十四日より大祭行はれたり、稀代の大祭とて遠近の老若來集するもの其數を知らず、近江鐵道は參拜者の爲に乘車賃の割引を爲したり、

運命水神社

運命水神社は下一色松居文右衛門邸より北一町の地に在り、其地は押立客人社の神官文屋氏の邸後（古へは邸内と云ふ）なり、一簇の樹林中に周圍七十餘尺深さ數尺の池あり、水淺けれども旱時も涸れずと、口碑に天元元年神異あり文屋氏の邸地に大音響ありて地陷沒池を爲す依て運命水と名つくと、押立山上の押立宮の權殿を此地に營みやがて山上の神を一旦此所に遷坐し、半年後更に高波根野に神籬を結び神殿を建て遷宮す、是れ今の押立神社なり、斯る緣故により運命水神社は今も押立神社の攝社たり、文右衛門清重の下一色村に潛居するや常に當社を崇敬して靈驗を得たり、依て子孫代々尊崇す、

寶珠寺

寶珠寺は松居家一族の菩提寺なり、同寺の史料によれば寛永五年戊子三月二十一日、松林金右衛門清光當寺創立の爲に寺地を寄進し、翌年五月朔日芳壽庵の眞盛和尚庵株を寄附し、依て同志相謀り一寺を創建し、寶珠寺と號し、蒲生郡瓜生津村弘誓寺末寺となる、一如法主の時木佛安置寺號公稱を許さる、文化七年松林清

豐等相謀り堂宇を改修す、是れ現在の堂なり、從來本堂は西向なりしが明治三十一年冬修繕に際し北向とし、翌三十二年四月二十六日遷佛供養と惠燈大師四百回忌を修す、元來一小刹なれば世襲の住僧なく、瓜生津弘誓寺の徒弟來り住し、又中一色村弘誓寺や、北蚊野村教照寺より便宜寺務を兼掌す、

神の池掘鑿と其寄附

押立庄は旱時水乏しき地多くあり、就中下一色村は甚しき旱害地にして降雨遠ければ直ちに水の不足を生ずる地なり、故に古來農家の苦辛は常に他村に超越したり、大正十四年冬、松居泰次良は其弟房治郎と議し試に一井を穿ち地下水の有無を試みんとブラオン式鑿井の技師をして小字里頭（さとがしら）に大規模なる鑿井を試んと十月十八日起工式を擧げ爾來技師は多くの人夫を指揮して掘鑿すること一百餘日、翌十五年二月に至りて地下三百六十尺に達し一大水脈に逢遇し多大の水量を揚げ得たり、依て二月九日、十日、十一日揚水試驗を兼ね砂揚げを行ふ、水

（色一下）堂御寺珠寶　寺提菩家居松

（上）寶珠寺に本尊木佛安置許狀

（下）同寺に蓮如上人影像安置許狀

況實式工起井鑿池の神用漑灌色一下

下一色灌漑用神の池鑿井竣功式記念撮影

量豐富にして經十二インチの鐵管に溢れ出て、一日の揚水量實に二萬石餘に達したり、泰次良兄弟之れ神助を得たるものと大に喜び、やがて附帶工事就り、揚水權を大字下一色に寄附したり、大字にては兄弟が赤誠の好意を喜び之を受け直ちに神の池と稱し、水利組合を設け配水の溝渠を整理し、村内水田の灌漑に便にし、十月十七日竣功式を擧行したり、鑿井の總費用實に貳萬餘金を要したり、然れども此の一擧以て一村永世の旱害を救ふを得たるは國家の慶事と稱すべし、泰次良兄弟は此の鑿井に係る記事は此册中に記載するを斷はるゝこと頻なれども、編者は如此美擧は範を世に示すべきものなれば寧ろ喧傳すべきを信すれば其概況を略記し、起工式揚水試驗及び竣工式の寫眞を登載し置くことゝせり、

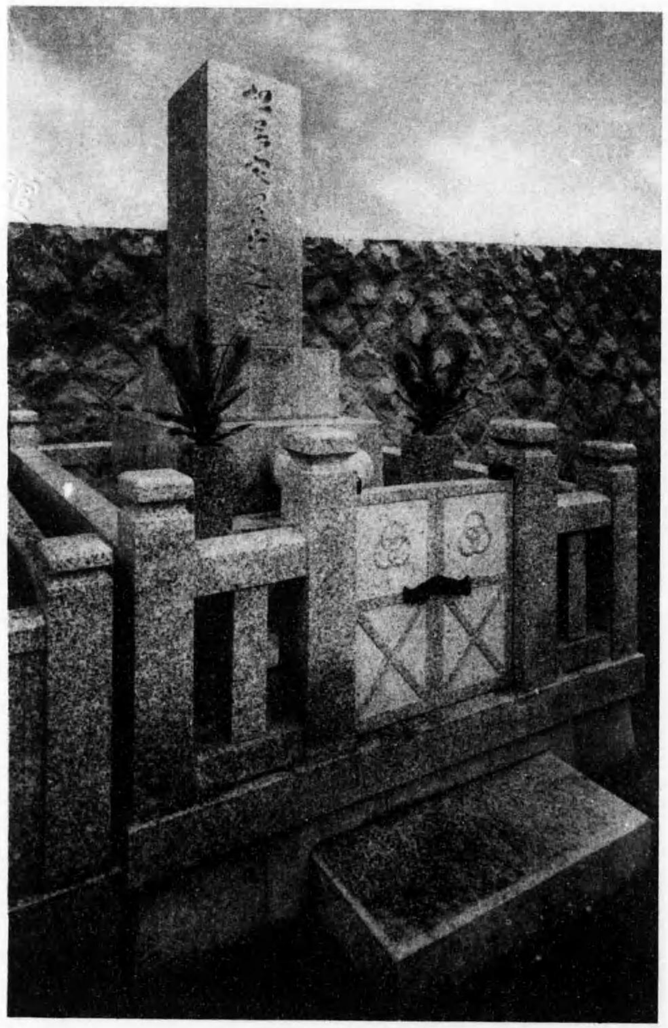
松居家總墓碑の建設

松居氏個々の墓所は下一色に在れども古來一村の掟として墓碑を建設せざる

ことゝなれり、故に墓ありと雖も墓標無し、村人中往々之を遺憾とするものあり、松居泰次良、同房治郎兄弟等謂へらく、倩惟るに子孫の相續するは祖先の餘德なり、子孫にして祖先を祀る一定の祭場なきは耻づべき事なりと、兄弟相議し昭和二年春遂に京都東大谷に一區の地を買ひ墓所を定め、同族諸氏に謀り石碑を建立し家祖清重以後一族の鎭靈所とす、五月工に命じ十一月に至りて就る、松居家の源流たる下間蓮位房十九世の當主下間九鬼三郎仲臣氏碑文を撰し、本願寺文書科長信國堅城氏碑字を題し、家祖以後の來由を明にしたり、十一月下旬功竣る、即ち十二月四日を卜し除幕式を行ふ、此日先づ宗家以下松居分、支家祖先以來の諡號を彫刻したる銅牌と、同年二月物故したる第六分家第一支家の祖眞三郎清安の室晃德院妙了尼の遺骨とを碑腹中に納め、午前十一時半大谷一山の僧侶導師以下六人を墓前に招し阿彌陀經讀誦供養す、下間九鬼三郎氏を始め一族十八人、松居商店々員總代八人來會し、順次燒香禮拜恭く祖靈を祭祀す、恰も天氣晴朗冬暖春の如く供物供華の燦、讀經修式の嚴、香烟一直高く揚りて芳香式場に薫し、一族和氣靄々然たり、九天の各精靈も皆來りて此の大饗を欣受したるべく幽明共に感喜に滿ちたり、式後墓前に記念の撮影を爲す、是れ松居家創立以來の大典を永く傳ふるものなり、夫より圓山公園の左阿彌樓に一同休憩して後、全員相伴ふて鼻祖下間家蓮位房の墓所に參拜し、再び歸樓午後四時齋宴を開く、席上下間氏は函入朱杯一個づゝを一同に分配せらる、之を開けば下間家の紋所三ツ蝶の中に廿の裏菊を圍ふ紋と、松居家の紋所三つ輪とを交叉したる模樣を金泥にて畫き、下間家が松居家と舊緣を再びする寓意の意匠なるに一同深く其好意を感謝し怡悅の情坐に溢る、夫より一同團欒の歡を盡し七時閉會したり、當日燒香の順次と齋宴の席次とを附記す、

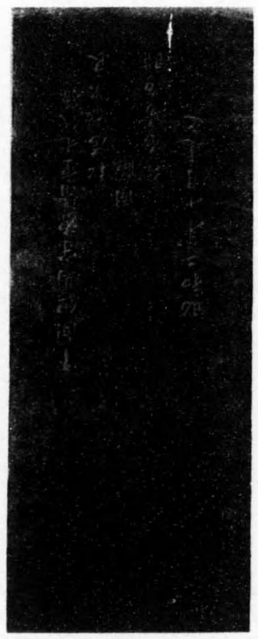
燒香順

松居泰次良　森嘉平　村松三郎兵衛
下間九鬼三郎　松居一良　松居文左衛門　松居房治郎
松居文次郎　松居謙三



京都東大谷　松居家墓

森半次郎　松居良三
松居しげ　松居とみ　松居光三郎　松居この
松居すゑ　店員一同六人　女中二人　松居ふき　松居正子



銘 蓋 左

表碑蓋家居松
面 碑 中

文 碑 右